



三六災害 昭和36年（1961）6月27日

「伊那谷災害」とも呼ばれる三六災害は、その被害の規模と深刻さにおいて、長野県災害史上空前のものといわれています。土砂の流出もすさまじく、洪水とあわせて大河原集落を押し流しました。

大崩壊によって流れを変えられた川、 土砂の猛威を記した伊那谷の災害。

三六災害の大きな特徴となっているのが、猛烈な土砂災害です。標高3,000m級の山々が連なる2つの山脈にはさまれた谷の中央を天竜川が流れる地形、そして脆弱な地質を持つ伊那谷に、一日で325mm（飯田測候所）の雨量を記録した集中豪雨が襲いました。このため、いたるところで、崖崩れや地すべりなどの土砂災害が発生。

下伊那郡大鹿村の大西山は大崩壊を起こし、崩落した大量の土砂が小渋川をせき止め、ついにはその流れを変えてしまいました。また、支川から流れ出した大量の土石は天竜川本川の堤防を決壊させ、下流部では溜まった土砂で河床が上がったため堤防を越えて水があふれ出すなど、大災害をもたらしています。

